

平成30年9月30日(日)

老球の細道439号

9月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「人間は生まれながらにして死刑囚である」と言ったのはフランスの哲学者パスカルである。悪いことをしなくとも、この世に生を受けた瞬間、例外なく誰もがいずれ死を迎える。もちろん私もである。しかし、死は全く学習できないから、死別する時の心の準備は死ぬ瞬間までできないだろう。

今月は先輩、知人、親戚など5人の葬儀があった。皆どのように死を迎えたのか、よくわからないお坊さんのお経を聞きながら想像した。また、人間ドックがあり、今回もまた胃内視鏡検診で「病理組織検査」判定が下され、結果が出る2週間を仮死状態で過ごした。改めて、死を想うことは「今ある生」を大切にすることだと実感させられた9月だった。

1・親戚の葬儀における喪主の挨拶から

◆「教学相長ず」〈義妹の夫に義父が亡くなる前に語った言葉〉

人に教えることは自分が学ぶこと。退職後もクリニックを通じて益々バスケットボールの知識が増え、奥深さに感動を覚えると同時に自分の非力さを痛感させられる日々である。

2・読書から

◆「チーム内でのおしゃべりは欠かせません。会話は宝の山であり、無駄話は宝話なのです」『コーチングクリニック』チームビルディングの秘訣〉心理学者の河合隼雄さんは、視野を広げるために一番大切なものは「道草」「ゆとり」「遊び」だと説く。毎週木曜日の二瓶さんとの「ココス・ミーティング」でのおしゃべりはアイデアの宝庫である。

3・新聞のコラム等から

◆「ステージに立つには、戦争に行くくらいの覚悟と体力が要る」〈朝日・ひと・シャルル・アズナブール〉94歳で今でも舞台に立つシャンソン歌手の言葉。バスケットボールクリニックでコートに立つ時の覚悟も同じ。慣れてはいけない。いつでも緊張し、選手やコーチたちの反応を恐れ、そこから色々なことを学ばなければならない。

◆「いいことはたくさん起きているのに、それらを当たり前のように受け止めて、じゅうぶん味わっていなかった。なぜうまくいかないのかと不満を持ち、反省することに多くの時間とエネルギーを費やしていたこともわかった」〈朝日・天声人語〉「つらいこと日記」ではなく「いいこと日記」がある。その日の良かったことを三つ、簡単にメモするだけ。悪かったことはあえて書かないという。私も「孫守り日誌」で実施する。

◆「負けていて残り1分というときに、笑えるかどうか、ということなのです」〈朝日・折々のことば・岩出雅之〉会津高校時代に直之元OB会長にもよく教えられた。当時接戦の多かった会津高校ホケッツ軍団。ビビる選手たち、緊張する私自身に言い聞かせた言葉「バスケットのゲームはやる人も見る人も接戦で逆転が最も面白いんだ。ニタッ」

◆「負けるのが大嫌い。たとえトランプでも。トレーニングでもすぐ、僕と競争したが。頂点に立つ者に欠かせない天性だ」〈朝日・ひと・大坂なおみのコーチ〉

8月は水泳の池江、9月はテニスの大阪と女子アスリートの活躍が目立った。いずれも素直で負けず嫌いだという。孫娘も負けるのが大嫌い。孫の将来のためにと遅だしジャンケンで負けてやる爺の悲しい性。